

Title	ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの
Sub Title	
Author	船田, 三郎(Funada, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.15, No.4 (1937. 2) ,p.1(513)- 38(550)
JaLC DOI	
Abstract	Leopold v. Kanke (1795-1888)の永い一生中には、記念すべき年も少くなかったであらうと思はれるが、今より丁度百年前、即ち一八三六年もその中に数へ入れられる年の一つであらう。何となれば彼の正式に伯林大學の正教授に就職したのが、實に是の年であったからである。しかし彼が三二年以来、その編輯に従事せるHistorisch-politische Zeitschriftを廢刊するの止むなきに至つたのもこの年であり、その傑作羅馬法皇史を完成して、益々その名筆をたかめたのもこの年であり、その父を亡ひ、次いで十旬を経ずして、その母の喪に服するに至つたのも亦この年であった。この機に三六年は彼にとっては所謂悲喜交々到れる年としてその記憶に銘ぜられたことであつたらうと思はれる。百年前のこの年を機會に彼れを回想して。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370200-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370200-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの

2/14/17

船 田 三 郎

Leopold v. Ranke (1795—1886) の永い一生中には、記念すべき年も少くなかつたであらうと思はれるが、今より丁度百年前、即ち一八三六年もその中に數へ入れられる年の一つであらう。何となれば彼の正式に柏林大學の正教授に就職したのが、實に是の年であつたからである。しかし彼が三二年以來、その編輯に従事せる *Historisch-politische Zeitschrift* を廢刊するの止むなきに至つたのもこの年であり、その傑作羅馬法皇史を完成して、益々その名聲をたかめたのもこの年であり、その父を亡ひ、次いで十旬を経ずして、その母の喪に服するに至つたのも亦この年であつた。この様に三六年は彼にとつては所謂悲喜交々到れる年としてその記憶に銘ぜられたことであつたらうと思はれる。百年前のこの年を機會に彼れを回想して。

—

Ich sage nichts, als...dass ich erst will verstanden sein, ehe denn gerichtet.—*Sämtliche Werke*, Bd., 53/4. S. 665.

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの (船田)

(三一)

—

レオポルト・フォン・ランケが十九世紀に於ける最大史家であること、少くもその一人であることは何人も認むる所で、今更云ふ迄もないことであるが、しかしこの大史家が多數の學者によつて如何に觀られたか、そのランケ觀は如何であつたかと云ふ問題を提供して、歴史家や、哲學者の心眼に映じたランケ像を見るに、それは必ずしも一樣であつたとは云へない。即ち或る學者は彼を以て、實證主義を代表する純然たる經驗史家であるが如く見、他の學者はこれに反し、その思想を以て獨逸觀念論の最も主要なる形而上學的傾向の一つをあらはせるものとなす。又或るものはその理念に關し、それが形而上學的たるが如くひゞくのは、單にその表現の仕方、或はその様式の然らしむる所で、實は決して形而上學的ではない、むしろこの歴史研究の大家は、自然科學的精神に無限に接近し、その專攻する史學に於て自然科學的解釋に親近せる、従つて現代的思考の潮流の中に入れらるべき立場に立つものであると斷ずる、然るに第四の學者によれば、彼はルーテルやフィヒテの影響を受けたもので、神祕的唯心論的思想傾向と普遍主義的傾向とが、その歴史的思考の中樞をなすものであると見られる。これに對して又史家の中にはその決して神祕的ならざる所以を説くものもある。その他、彼は浪漫派に屬する一人なりと解せられ、又彼はヘーゲルの歴史哲學には、いたく反對して居るにも拘らず、却て之をヘーゲルの側に引きよせ、そのこれに反對する態度を以て忘恩的なりとさへなすものがある。かくの如く學者の彼に關する見解の相違する所よりして、「彼が前世紀の精神史中に於て、如何なる特殊の地位を占むべきかの問題は、

未だ一義的な解答を見出しては居ない」と主張する學者もある程である。無論それは上述せる所より見て、當然のことであらうが、しかしこの様に相異なる見解の、彼の歴史的思想について下さるゝ根據は、然らば何處にあるであらうか。蓋しそれは彼の歴史に關する思想の全面に互れる考察に基づかず、何れも只その一方面のみに拘はるが爲めではなからうか。彼の思想は決して單純ではなかつた。換言すれば彼の思想の成熟し來る迄には、當時の多方面的な思想が彼に影響を及ぼしたものと見ねばならぬ。勿論彼はキルヘルム・シネラー(Wilhelm Scherer)によつて、その先驅者、或はその蒙れる影響を訊された時、これに對して、Ich bin überhaupt viel originaler, als Sie denken と答へたと云ふことあるが、しかしこの答辯は必ずしも如上の言と矛盾するものではなからう。それはある特定の説を繼承せるものにあらずることを意味することは云ふ迄もないが、しかし original と云ふことは、必ずしも文字通り獨創的たることを要しない。むしろ多種の思想を攝取し、咀嚼し、消化し、かくて己れの個性を通して産出せるものとの意味にも解せられるからである。現に彼はツキデデス、ニープール、ルーテル、フィヒテに負ふ所の尠からざりしことはその自白する所であり、又二十年代に於ける哲學派と歴史派との鬭争の、彼に與へたる刺戟、殊に歴史派を代表する人々の、彼に及ぼせる感化は又その認むる所であつたのである。それ故彼の思想は、彼自ら云つて居る様に、他人の考ふるよりも original なものであつたにせよ、之を分析すれば、いろ／＼な思想要素をその中に見出し得るであらう。従つて彼の立脚地なり、思想傾向な

りが問題とせらるゝとき、單に一方面からのみ彼を観ると云ふことは、決して當を得たことと云へない。なる程彼は、表面からこれを見れば、その研究に於て最も經驗的、實證的、科學的であつたと云へるであらう。しかしその裏面には、或はその研究の根柢には、熾烈なる哲學的、否、宗教的要求が存在して居たのである。故にその歴史的思想について述べんとするとき、彼は少くともこの兩方面から見られねばならぬと思ふ。しかしこの場合、何よりも先づ注意すべきことは、認識としての歴史と、出來事としての歴史、或は學としての歴史と、存在としての歴史との區別である。この區別は歴史一般を問題とする場合、常に念頭におかねばならぬ所のものであるが、今こゝにランケを主題とせんとする時、殊に然りである。何となれば今述べた表裏二面の考察も、又先きに擧げた諸家のランケに關する見解も、畢竟この區別に關係するものであるからである。然らばランケは認識としての歴史の本質と、その方法を如何に解したるか。又彼は存在としての歴史に對して如何なる見解を抱いて居たであらうか。

## 二

先づ順序として第一の問題より始めよう。

彼によれば認識としての歴史、即ち歴史研究の果さざるべからざる任務は、何よりも先づ個々の事實を研究して、その眞理を闡明する所に存する。これが實にこの研究の第一の、直接的目的であつた。勿

論彼は後に述ぶる所によつて明かなるが如く、その最後の目的をば他の所においたにしても、歴史研究の直接的目的は、史實そのもの、探究にありと確信して居たのである。このことは機會ある度毎に彼の繰り返す所であつた。即ち彼は *Historie* 即ち *Erforschung der Tatsachen* と云ひ、「事實の探究そのものを以て己れの本來の任務となす」と云ひ、また「事實を、そがある通りに認識して、之をそのまま、表現すること、これが歴史研究」の本質であると云ふ。之を消極的に云へば、この研究は實際生活の利益の爲めにとか、政治上、道德上乃至藝術上の目的の爲めにとか、云ふが如く、歴史研究より見れば、むしろ外的な目的の爲めに存するのではない。只事實を明かにして、その眞理を知ると云ふことそれ自體が、その目的とする所である。このことは彼の處女作、ラティン・ゲルマン民族史の序言中の一節によつて最もよく云ひあらはされて居るのである。尤もこの一節はよく引用せらるゝ所であり、従つて多數の人々の知れる句ではあると思ふが、しかしそれが實に彼の一生の研究を支配した所のものであるから、ここに特にこれを掲げておかう。Man hat der Historie das Amt, die Vergangenheit zu richten, die Mitwelt zum Nutzen zukünftiger Jahre zu belehren, beigemessen : so hoher Aemter unterwindet sich gegenwärtiger Versuch nicht : er will blos zeigen, wie es eigentlich gewesen. この言によつても明かなるが如く、彼は何等か實用に供せんが爲めに、歴史研究に従事するのではなくして、その目的は一に「史實の眞」の闡明にあつたのである。勿論彼にとつては、この「史實の眞」を明かにすると云ふことが、その結果から見

て、何等の利益をも齎さないと云ふのではない。實際、例へば政治家が一國の政治に關與せんとする時、當然その國の歴史に關する知識を必要とするであらう。しかし學としての歴史は、政治家自らが果さんとする目的と云ふが如きものによつて左右せられてはならない。何となれば何等かの目的を指定して、歴史研究が企圖せらるゝ時、それによつて事實の公平なる觀察は、阻害せらるゝの虞あるからである。

更に又歴史研究は藝術上の目的を實現せんが爲めに存するのでもない。従つてかの藝術上の理論が、詩的作品に求むるが如き自由な展開と云ふことは、これを歴史研究に要求することは出來ない。彼は初め歴史研究に従事せる時、偶々スコットの歴史小説 *Quentin Durward* を讀み、これに對して大なる反感を懷いたと云ふことであるが、就中その不滿に堪へなかつたことは、この小説中に於けるカール大膽王とルイ十一世との取扱方であつた。それは結局、スコットの描く所は全然史實を無視せるものであつたからである。ランケ自らの研究によれば、スコットの描けるが如き人物は實際には存在しなかつた。勿論これはスコットの知つて居た筈である。にも拘らず彼は全然非歴史的な取扱方をして居るが、それがランケから見れば許すべからざることであつた。スコットの物せる所を、實際歴史に記載せる所と比較して見れば、後者は遙かに美しく又興味あるものであつた。彼はかくの如く見て、己れの研究に於てはすべて「想像によつて成れるものは一切これを避け、嚴格に事實によらんとした」と云ふことであるが、彼にとつては「事實が、よし如何に制限せられた、醜いものであるにしても、これを嚴密に事實として

表現せねばならない。これが歴史研究の最高法則である」とは彼の確信であつたのである。

しかし彼によれば想像のみが史家によつて排斥せらるべきものではない。その他理論と云ひ、學説と云ひ、政治上の主義、宗教上のドグマと云ひ、社會の輿論と云ひ、個人の意見と云ひ、史家は一切之を棄てねばならぬ。勿論何人でも政治上の鬭争や、宗派の軋轢やに當面する時、これに關して何等の意見を有せず、又これに對して何等の態度を取らぬと云ふことは、實際人<sup>プラクティカル</sup>としては到底不可能のことであらう。しかし何人たりと雖も苟も史家たる以上は、かゝる鬭争や軋轢を超越しなければならぬ。しかし、之を超越して高所大所より、鬭争當事者の意圖する所を理解し、かくしてこれに従つてその行動を評價し、後初めて之を記述せねばならぬ。實にこゝに史家の任務が存す」とは彼の云ふ所である。蓋しこれは鬭争に對して何等の價值判斷を下さず、純客觀的態度を以てこれにのぞむべきことを意味するものであらう。

彼はこの様に純客觀的態度を持し、事實の眞をあらはすことを以て、史家の第一の目的としたのであるから、若しこれに反する様な史家に遭遇する時、そは當然彼の批評的とならざるを得なかつた。彼は或る機會に Böhmér に反對して居るのであるが、それはこの史家の、第十三世紀を以てあらゆる世紀中の最上なるものなりと云ふが如き意見に捕はれて居たが爲めであつた。ランケより見れば、如何なる時代も神の前に於ては平等なるものであるから、ある時代を以て特に神に選ばれたる時代と見ると云ふ



ことは大なる誤謬であつたのである。更に又彼はある時ゲルヴィーヌスを非難したが、それは結局この史家が實人生から己れの立場を取り、そしてそこから歴史を考察せんとしたからである。ゲルヴィーヌスのかかる態度を取つたと云ふ理由は、歴史研究は純客觀的であり得ない、それは實人生にはたらきかけねばならぬと云ふ持論に存するのである。しかしランケによれば、かゝる立場からは人生が學に影響こそすれ、學が人生にはたらきかけると云ふことにはならぬ。若しこのことを可能ならしめんとすれば、先づ吾人は現在をはなれ、自由な客觀的な立場に立つことを要すると云ふのであるが、彼にとつては「現在」に己れの立場を取つて、これより過去を考察すると云ふことも、過去の或る時代を理想的時代と見、これに照して他の時代を批評すると云ふことも避けねばならぬことであつた。何となればかゝる仕方によつては、彼の所謂歴史研究の目的は到底果されないからである。

繰返して云ふが、彼にとつては事實の爲めの事實と云ふことは、その最も重んずる所であつた。その爲めに、彼は如何なる場合に於ても、換言すれば英、佛と云ふが如き外國の歴史の研究に於ても、法皇史と云ふが如きものを研究するに際しても、宗教改革を、革命を論ずる場合も、ドン・カールを、サヴオナローラを、ワレンシュタインを記述する場合も、全然主觀を捨て、事實を如實に現はさんとした。彼はその著「英國史」中に於て「予は予の自我を消して、只事物をして語らしめんことを欲す。」とさへ云ひ、而してこの點からして彼は、史家ドロイゼンの「自ら云ふ所多く、事物をして口をきかしむるこ

との少き」を非難して居るのであるが、この句は最もよく彼の立場を表はして居るものと云はねばならぬ。因にランケのこの句を引用して自我を消しては學の研究そのものが不可能ではないかと、批難するものがある。勿論それは難するもの、云ふ通りである。研究の主體は自我なるが故に、この自我を全然消し去るとすれば、學的研究は到底なし得るものにあらざることとは云ふ迄もない。しかしランケのこの一句にもれる意味はそこにあつたのでない。學的研究に自我の必要なことは、云ふ迄もなく彼の知る所であつた。現に彼は自ら明かに、「對象の認識に主觀的媒介の必要なことは吾人の本性に存す」と、さへ云つて居る程であるからである。或は云はん、自我を消すと云ふことと、主觀を必要とすと云ふこととは矛盾するの言ではないかと。しかし吾人はこゝに *Praktisches Ich* と *wissenschaftliches Ich* と云ふが如きものを區別することが出来ると思ふ。前者は一定の立場に立ち、事物に對して一定の態度をとり、かくて之を是非し、褒貶する自我であり、後者は只事實の眞理を明かにすることをのみ目的とする自我である。リツカートの價值評價と價值關係との區別も結局こゝに歸着することと思ふが、ランケが消さんことを望んだ我は前者であり、對象の認識に必要と見たる主觀は後者である。かくの如く解すれば、主觀を消すと云ふこと、主觀の媒介を要すと云ふこととは必ずしも矛盾するの言であると云ふことが出来ない。事實、彼の嫌惡せし所のものは何等かの立場に囚はれることであつた。そしてその立場から歴史を是非することであつた。彼にとつては「歴史は刑事裁判ではなかつた。」彼の希求せし所

のものは公平無私、全然事物の中に没入し、かくて自ら口をきかず、事物そのものをして物語らしめようと云ふことであつた。この點からして彼の立場たる所謂客觀主義の如何なるものであるか、と云ふことも理解せらるゝと思ふが、それは如何なる意味でも我と云はるゝものは皆これをなくすと云ふことではない。詮する所、それは何等の立場、何等の主義、何等の主張にも囚はれず、不偏不黨、公平無私なる態度を以て事物にのぞむことを意味する。彼は云ふ、*Objektivität ist zugleich Unparteilichkeit*と。

以上述べた所によつて明かなるが如く、彼にとつては史實と云ふことが先づ第一に、その關心する所であつた。本來如何にあつたかを示すと云ふことがその欲求する所であつた。個々の事實の根本的探究、虚飾なき赤裸々の眞理の把握、これ彼の念願とする所であつた。彼がラティン・ゲルマン民族史の研究に際して、この歴史に關係ある史家の批評を試みたのも、この希望を實現せんが爲めであつた。編纂物を避け、出來得る限り直接史料に頼らんとしたのも、亦この希望を充さんが爲めに外ならなかつた。しかしこの事實の眞を重んずると言ふことは、所謂歴史研究に於てのみ存したのではない。彼に於ては時事問題を論ずる様な場合に於ても亦さうであつた。彼は一八三〇年代、政治雑誌の編輯に従事したのであるが、この場合、彼のとれる態度は、如何なる主義にも、理論にもよらずと云ふことであつた。相反する理論の何れにも左袒せず、否、理論と名のつく以上はその中間に位するものをもとらず、却て一切の理論を超越して、只管事實を明かにせんとつとめたのである。何となれば眞理は只事實にのみ存す、

とは彼の確信する所であつたからである。従つて彼のこの雑誌に掲載せる論文は、何れも歴史的なものであつた。彼は歴史的事實によつて理論の誤謬を是正せんとしたのであつた。彼がこの雑誌を名付けて、單に *Politische Zeitschrift* と云はず、特にこれを *Historisch-politische Zeitschrift* と云へるもこの爲めであつた。無論この雑誌は失敗に終つたものと云はねばならぬが、しかしそれは兎に角、彼が史實の眞と云ふことを如何に重んじたかと云ふことは、これによつても理解せられ得ることと思ふ。

### 三

以上余は特殊の事實と云ふことが、ランケの最も重んずる所であつたと云ふことを述べたのであるが、しかし彼の歴史研究は單にそれ丈に始終したのであらうか。勿論彼は上にも述べた様に、歴史を以て事實の探究そのものの如く斷じ、又史家は個々の出來事そのものに興味を有し、快樂を感ずること、恰も花を愛するもの、只花なるが故に之をたのしみ、それがリンネの如何なる種類に、或はオーケンの如何なる部門に屬するかを顧みざるが如くでなければならぬと云つて居るが、しかしそれは彼自ら云つて居る通り、史家たるに必要な條件の全部ではなく、只その一つに過ぎなかつた。彼はこの外、普遍と云ふことに着眼し、決して之を忽にすべからざることをして、史家の第二の條件と見做して居た。彼は「史家は普遍に對して眼を開けておくことが必要である」と云ひ、又特殊に對すると共に、普遍に對し

ても等しく常に注意せねばならぬとは、彼が教壇上よりも、しばしその學生に説く所であつたと云ふことである。従つて彼にとつては普遍と云ふことが特殊と同程度に於て重要性を有して居たものと云はねばならぬ。しからはその普遍と云ふことは如何なる意味に解せらるべきものであらうか。彼は大抵の場合に於てさうである様に、この場合に於てもその精確なる概念規定を與へて居ないのであるが、この普遍と云ふことが彼に於ては少くとも二様に解せられねばならぬ。一は部分に對する全體と云ふ意味での普遍である。彼から見れば、個々の出來事は決して孤立して居るものではなく、それ等は互に相關聯して存するのである。この關聯せるものから見れば、個々の出來事は何れもその部分である。又この關聯せるものを一體と見れば、それは全體である。勿論この關聯は個々の出來事のみに限らるべきものではない。或る關聯せる全體が他の同様な全體と關聯して、より大なる全體をなす。時代が時代と關聯し、民族と民族とが關聯し、かくて世界史的全體をなす。彼が歴史研究は世界史的でなければならぬと見たのも、「如何なる民族も他の民族と接觸せずして存する」ものはないからであつた。それは兎に角彼が普遍と云ふことを、上述の如く解したと云ふことは *das Ganze* であるとか、*der allgemeine Zusammenhang* であるとか、*der Zusammenhang des Ganzen* であるとか云ふ様な言葉の彼によつて使用せらるゝに徴しても明かである。第二の普遍は直接知覺することは出來ないが、個々の現象を通して直觀せらるる精神的なものを意味する。この場合の普遍は個々のものに遍通なものと云ふ意である。個人のいろ／＼な行

動はその個人の精神の顯現である。従つて行動の方面より云へば、精神はそれに遍通的なものである。國民の文化現象、例へば風俗、習慣、言語、宗教、藝術等はその國民に特有な精神の現象である。従つて文化現象の方面より云へば、その精神はそれ等に遍通的である。かゝる意味での普遍も、よしそれが精神的なものと云はれやうが、生命と名付けられやうが、又彼によつて到る所に使はるゝ、理念の名によつて呼ばれやうが、彼が常に念頭にかけて居た所のものであつた。彼は既に一八二八年、ヘーゲル學徒のレオ (Heinrich Leo) の攻撃に對する答辯中に於て、己れの研究は決して單に特殊的な事實の穿鑿に終るものではない、それは却てこの特殊を通して普通を表現せんとしたものだと云ひ、*äusserlich nur Besonderheit, innerlich—so verstehe ich Leibniz—ein Allgemeines. Bedeutung, Geist.* と云つて居る所から見ても、彼は初めから内的な、精神的な、普遍的なものを、外部に現はるゝ、特殊的なものを通して、直觀せんとして居たことが明かである。以上述べた様に、彼は普遍を二様に解して居たと見らるべきであるが、しかしこの兩者は勿論無關係なものではない。何となればかの全體を全體たらしめ、普遍的關聯を可能ならしむるものは、この内的な、精神的なものであるからである。しかしそれは兎に角、彼は特殊を探究すると共に、常にその心眼を普遍に向けて居たと云ふことはたしかである。

さてこの普遍的なもの——これが歴史哲學に關係を有するものであるから、今は更に觀點をそこにおいて考察を進めて行かうと思ふが、この場合、先づこゝに注意しておかねばならぬことは、第一、彼は

當時の歴史哲學に對して、如何なる態度を採つたかと云ふことと、第二、歴史哲學そのものをば彼は如何に觀て居たかと云ふこととの區別である。前者は學としての歴史とその方法とに關係するものであり、後者はこれに反してむしろ歴史そのものに關係を有するものと見ることが出来る。この區別は以下に述ぶる所より自ら明かとなること、思ふから詳細の説明は略し、順序として第一の問題から考察して見よう。

彼は一八六七年、學位授與五十周年記念祝賀會に於ける一答辭中に於て、四十餘年前のことを回想し、當時二つの傾向、即ち哲學派と歴史派と對立して、互に相争ひつゝあつたと云ふこと、ランケ自らはその性質上より云ふも、又その研究より云ふも當然歴史派に屬するもので、その代表者等と親しく交際したと云ふこと、又この争ひを躬自ら體驗し、それが己れに又己れの發展に影響すること頗る大であつたと云ふこと等を述べて居るのであるが、こゝに所謂哲學派なるものはヘーゲル及びヘーゲルを中心とする學徒の一群より成れるものであることは云ふ迄もない。然らば歴史派なるものは如何。それは要するに歴史法學派のサヴィニーや、アイヒホルンや、ニープールや、シュライヤマハーの如き學者たちを總括して指すものと云つてよいであらう。これ等の學者中殊にサヴィニーの如き、シュライヤマハーの如き最も激しくヘーゲルと相争つたものであるが、それ等が又ランケの親しく相交はれる學者でもあつた。今この鬭争の内容についてはこゝに云ふを要しないが、兎に角彼の所屬は歴史派であり、而してその派

が哲學派と相容れなかつたのであるから、従つて又ランケもヘーゲル等の哲學派に反對であつたと云ふことは當然であらう。然らば歴史派の、特にランケの哲學派に反對する根據は那邊に存したのであつたか。それは畢竟 *Spekulation* と *Empirie* の對立に基づくものと云はねばならぬが、今之を歴史研究について觀察すれば、ヘーゲルの所謂世界史の哲學なるものは經驗的史的事實をはなれ、思辨によつて歴史を先驗的に構成するものであつた。換言すれば、彼は彼の所謂世界精神の本質からその發展過程を演繹し、かくて得たる圖式に照して歴史を考察するものであつて、その方法は全然思辨的であり、先驗的であり、演繹的であり、構成的であつた。しかしそれは單にヘーゲルのみではなく、フイヒテも亦然りであつた。彼は一八〇四—五年の冬、「現代の特徴」について講演し、その特徴の那邊にあるかを明かにせんが爲めに、全歴史の發展を論述して居るのであるが、(それが彼の歴史哲學觀と稱せらるゝものである。)この場合、彼の論述の方法はヘーゲルのそれと同じく又先驗的、思辨的であつたのである。即ち彼は歴史の哲學的考察なるものを以て、一切の可能なる歴史的現象を離れ、先づ一つの先驗的概念を構成し、而してこれから一切を割り出すにありとなし、かくて彼はかゝる概念として *Weltplan* なるものを前提とし、これから人類史の發展過程を演繹したのである。然らばその所謂 *Weltplan* とは如何なるものであるか。彼はこれを説明して人類の地上生活の目的はそのこゝに於ける一切の關係を自由に、或は意識的行動により、理性に従つて處理する所に存すと云ふのである。語を換へて之を云へば、彼は人



類が己れの本質たる理性の自覺に到達し、かくて理性の法則に従つて自由に行動するに到る時、その地上生活に於ける目的が實現せらるゝとなすのである。彼はかくの如き目的々見地から理性の本質に基づき、人類史を五期に區分して、理性が本能として働く時期、理性が權威として働く時期、絶對的解放の時期、理性の意識の時期、理性の術の時期となす。しからばそれ等の各時期は如何なることを意味するものであるか。それは無論充分なる説明なくしては讀者の理解に苦しむ所であらうが、しかしフイヒテの説を敘ぶることそれ自體がこゝで目的とする所ではないから、之を省略してもよいと思ふ。詮ずる所、彼は理性の本質上、人類は如何に發展すべきかを論じたもので、この場合、事實としての歴史は毫もその顧る所ではなかつた。否、彼に取つては顧るを要せざる所であつた。何となれば、彼から見れば史的發展は事實を俟つ迄もなく、理性の本質上よりして先驗的に知られ得るものであつたからである。

以上述べたヘーゲルやフイヒテの歴史の哲學的考察は、ランケの到底反對せざるを得ざる所であつた。何となればランケから見れば、何よりも先づ彼等の取れる方法は誤つて居たからである。已に先きにも述べた様に、彼は主義、主張、理論、學說と云ふが如きものに拘束せらるゝことを欲しなかつた。刹那の要求を絶對化して出來た主義とか主張とか、云ふ様なものは云ふ迄もなく、事實に基づかず、單なる思辨によつて構成せられたる理論や、學說は、よしそれが哲學的であるにせよ、すべてその排撃する所であつた。彼はフンボルトと同じ様に *Freiheit der Ansicht* を欲した。然るにフイヒテやヘーゲル等は

哲學的思辨によつて出來た普遍的抽象概念から出發して、歴史を先驗的に構成せんとしたのである。しかしかゝる仕方は、飽く迄も事實を主とする彼の經驗的、後天的方法とは、まさに對蹠的であつたと云はねばならぬ。彼から見ればこの後天的方法こそは眞の意味に於ける學の方法であつた。従つてかの思辨によつて普遍的な概念を構成し、それから特殊的なものを演繹すると云ふことは、歴史研究の爲すべきことではなかつた。勿論彼は普遍的なものそれ自體に反對するものでない。それは特殊的なものと同じ程度に於て重要性を有したものであることは上に述べた通りである。彼の反對した所はむしろこの普遍的なものを前提として、それから一切を演繹する方法にあつたのである。彼によればこの普遍的なもの、特殊的なもの、その關聯とを注意して觀察するものに直觀せらるべきもので、哲學や神學から借りて來てはならぬものであつた。この點に於ても、彼はフンボルトとその見解を一にするものである。フンボルトはその論文「歴史記述家の任務について」の中に於て、普遍を求めんが爲めに哲學や神學に行つてはならぬと云ふ。ランケも亦「或るものは哲學說や、神學說に逃避し、かくてこの說に従つて歴史を形成する。しかし彼等のかゝる誤謬より云々」と云つて居るが、これは歴史研究は如何なる哲學にも神學にも頼るべからざることを意味して居る。彼によれば普遍的なものは神學や哲學から借りて來るべきものでもなければ、又これ等の學者の如く思辨によつて案出すべきものでもない。そは却て歴史研究によつて史的發展の中から得らるべきものである。彼は思辨的思想の追求と歴史研究とを對立せ

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの (船田)

(五九)

しめ、後者の前者に比して一層多く吾人を眞實在の認識に接近せしむるもの、又その誤謬に陥るの一層少なきものなることを説けるは一八二七年の書簡に見え、又普遍的な眞理は、かの思辨的思想によるが如く迅速に所有せらるゝものではなく、事實の精細なる研究を俟つて後、初めて得らるゝ望みあるものなることは、一八三一—四九年の一般感想録中に見えて居る所である。

以上述べた所によつて、ランケは當時の歴史哲學、即ち先驗的、普遍的概念から歴史を演繹、構成する方法には、斷然反對の態度を取つたと云ふことは明かである。彼は思辨的たるにしては、餘りに實證的、經驗的であつた。彼は抽象的に事物の本質を究め、これから論理的演繹を試みると云ふことは、その好む所ではなかつた。彼は特殊的なものに對して非常なる關心を有した。これは彼の本性の然らしむる所であつたことは、彼自ら *über jedes besondere Leben freue ich mich meiner Natur nach* と云つて居るに徴しても明かである。しかしこの場合又彼の青年時代に於ける教養と云ふことも忘れてはならない。彼は初め僧院附屬の學校 *Donndorf* や *Schulpforta* に學び、進んで *Leipzig* 大學に入り、籍を神學部においたが、しかしその好む所はむしろ文獻學、古代學の方面にあつた。而してこの方面に於て彼は *Daniel Beck* や *Gottfried Hermann* と云ふが如き文獻學者に負ふ所が尠くなかつた様に見える。更に彼は *Frankfurt a. O.* に赴任しても、その擔當する所は古代文學史であつた。この頃よりして彼は古代の歴史家を組織的に研究し、かくて後次第に歴史研究に入るに至つたのであるから、その方法は自ら實證的、經驗

的、後天的たらざるを得なかつた。實際、彼は初めからしてかゝる方法によつたことは、已に早く一八二三年、次第ハインリッヒに與へた書簡中に於て、*auch will ich das apriori fahren lassen, denn meine Schlüsse gehen alle a posteriori.*と云つて居る所によつて明かである。更に時代一般についてこれを云へば、彼の青年時代は一面、非常に哲學的であつたことは云ふ迄もないが、しかし他面に於ては又文學的研究が、かの Heyne や、Wolf や、その他多數の傑出せる文學者によつて試みられ、かくてそれが學の世界の一大領域を成すに至つたのであるが、かの哲學派に對立した歴史派なるものも、この領域を代表する一傾向であつた。ランケもこの傾向に屬する一人であり、従つてこの方面の大家と接觸し、かくてその影響を蒙ること尠くなかつた。然るにこの方面の重んずる所は *Empirie* であつたのであるから、ランケの學の方法は後天的、經驗的ならざるべからずとの信念は、この影響によつて確められた、と同時に、*Spekulation* に對するアンティパテーをば一層高めたものと云ふことが出來やう。それは兎に角、彼は歴史研究の方面に於ては、たしかに實證的であり、經驗的であり、客觀的であつたと云はねばならぬ。しかし彼はかゝる方法によつて、單に事實の眞理に到達する丈に甘んじたものではなかつた。彼はかくして得られたる眞事實を通して、より深き、より高き哲學的な、否、宗教的なあるものを得んとした。換言すれば彼は特殊なものを通して普遍的なものを、*real* なものを通して *ideal* なものを直觀せんとしたのである。しかるにこのことは存在としての歴史に關係するものであるから、次にこの方面

に向つて進んで行かう。

## 四

然らば彼は存在としての歴史、即ち歴史認識の客體、或は歴史そのものに對して如何なる解釋を下して居たのであるか。これを明かにせんが爲めには、彼の哲學に對する態度を今一度考へて見なければならぬ。彼は當時の哲學的主流たるフイヒテや、ヘーゲル等の觀念論的哲學のつた方法で、歴史にのぞむことに反對したことは、すでに上に述べた通りである。然らば彼は哲學の目指す所のもの、或はその目的とする所のものにも反對したのであるか。否、決してさうではなかつた。むしろ彼はこれを正當のこととして認めて居たのである。このことは、彼が一八三一——一八四九年の一般感想録中に於て、「歴史哲學の要求は避くべからざるもの、自然的なもの、人間的なもの」と云つて居るに見ても明かである。否、彼は歴史哲學を當然なものとして許したのみではない。これを目的と云ふ點より見れば、「すべての學は一致するもの、」従つて又人間史の研究も畢竟哲學である。即ちこの兩者はその目的を一にするもので、その間に何等の矛盾も存在しない。彼は云ふ、「世人は往々、哲學派と歴史派とを區別するが、しかし眞の歴史研究と眞の哲學とは矛盾するものではない」と。彼の歴史研究も、その動機は實にこの哲學の目的とする所に達せんとするにあつた。されば彼は己れの歴史研究を以て哲學的ならずと批難するもの

に對して、その當らざることを辯明し、余をして歴史研究をなさしむるにいたれるものは、實に、只哲學的、宗教的關心であると云つて居る程である。又彼がヘーゲルの哲學的方法には、極力反對したにも拘らず、その哲學的精神を認むるに吝でなかつたのもその爲めであつた。然らば彼の所謂歴史研究と哲學とに共通なる目的は何であつたか。哲學の目的とする所のものは現象そのものの認識でない。却てこの現象の根源或はその根柢に存する普遍的、實在的なもの、認識である。歴史研究も哲學とその目的を一にするものとするれば、この普遍的、實在的なものに到達することが、その目的でなければならぬ。彼は個々の事實的真理の闡明と云ふことを非常に重んじ、歴史即ち事實の探究とさへ規定したことは先きに述べた所であるが、しかしこの事實の探究は、彼にとつては第一の、直接的目的でこそあれ、その最後の目的ではなかつた。最後の目的はむしろこの事實に基づき、歴史的現象を通して、その根柢に存する普遍的、實在的なものを直觀する所に存したのである。彼は一八三六年、正教授就職論文、*De historiae et politicae cognatione atque discrimine* 中に於て次の様に云つて居る。「自然科学は、一面に於ては自然物の形態を刻銘に描かんとするが、しかし他面に於ては、より高尚なものを熱望し、自然とその各部分に與へらるゝ永久的な法則を究めんとするものである。しかしこの場合には、そは一切の流れ出づる自然の源泉に迄も進み行くことゝなる。歴史研究も亦かくの如し。即ちこの研究は事件の順列を展ぶるに極めて緻密にして精確なるを期し、かくてそれ等の各にそれ〴〵の色彩と、形態とを與ふるにこれ努

むるも、而してこゝにその最高の價值をおくにしても、しかも歴史はかゝる仕事に終るものにあらず。却てそは始源の探究に進み、人類を導く最も深遠、奥妙なる生命の活動に迄、透徹せんとするものである」と。以上の言によつて明かなるが如く、彼は一切の根柢に、直接知覺を絶したる實在的なもの、彼の所謂 *die verborgene Ursachen der Begebenheiten* 或は *das tiefste Geheimnis der Begebenheiten* の存在することを確信し、これに到達することを以て、歴史研究の最後之目的として居たのである。彼は云ふ。 *Oft dünkt mich, dass die Enthüllung gewisser Geheimnisse, das ans Licht Bringen einer Sache, die verdunkelt ist, das einzige sei, worauf ich in diesem Leben zu hoffen habe.* 然らば彼が解かんとし、啓示せんとしたる一切の出來事の、最後の隠れたる、神祕的な原因、即ち一切の現象の根柢に存する實在的なものは何であつたか。ランケはこれを種々なる言葉であらはし、或は之を端的に生命と云ひ、或はエネルギーと云ひ、或は力とも云ふ。しかしこの生命は單に生物學的な生命ではない。又それは物理學的なエネルギーや、クラフトでないことは云ふ迄もない。彼の所謂生命は人間に特有な生命である。しかるにこの生命を生命たらしむるものは、彼によれば精神、*Geist* である。従つてこの生命は精神的生命であり、かの力は道德的な力 (*moralische Energie, moralische Kräfte*) である。しかし彼は又これを理念 (*Idee*) とも稱して居るのであるが、しかしこの理念なるものは彼にあつては一義的な見方に従つて使用せられて居るのではないから、これは後に一括して説くこととし、こゝではしばらく精神なるものに觀

點をおいて述べようと思ふのであるが、この精神或は精神的生命、これ實に彼にとつては歴史的實在であり、而して現實的な歴史は、皆その顯現に外ならぬものであつた。彼は「世界に現はれ來る精神」と云ひ、「人間そのもの、内部に於て發展し、顯現し來る精神」と云ひ、又歴史を以て「精神の表現」なり等々、と云つて居るが、それ等は如上のことを立證するものであると云はねばならぬ。

彼はこの様に精神を以て歴史的實在と見做して居たが、然らばこの精神の本質は如何なるものであるか。それは如何なる内容を有するものと見らるべきであるか。彼は勿論かゝるものの存在すること、即ちその *Dasein* を信じては居たが、しかしその何であるか (*Wassein*) を先天的に云ふことは、彼の歴史研究の立場よりして、到底なし得る所ではなかつた。何となればその本質が先天的に知り得るものとするれば、歴史の發展過程は經驗を俟たずして云はれ得ることとなり、かくて彼の極力批難した歴史哲學の跡を追ふと云ふことになるからである。従つて彼はこれを定義し得ざるもの、抽象的概念の下にもたらし得ざるものとなして居る。又その發展には必然性は認め得らるゝが、しかしそれは「論理的範疇の法則」に従ふものと云ふ意味に於て必然的なりと云ふことは出來ない。精神的發展に於て認めらるゝ必然性は、彼によれば只因果必然性のみである。それは兎に角、彼にとつては、かの觀念論的歴史哲學のなせるが如く、精神の本質を先天的に規定し、それから論理的に歴史を演繹、構成すると云ふことは、歴史研究のなすべきことではない。むしろ史學の任務は、現象の方面から出發し、これを通して、その根柢



に存する精神を直観すべきものである。彼が「余の推理はすべて後天的である」と云ふのも、かゝる意味で云ふのである。しかしかゝる方法で精神を直観するに至る時、歴史の最後の目的が實現せらるゝこととなる。而してそのこゝに至る時、人間史の研究は哲學とその目的を共にすることとなるのである。彼は云ふ。Wie denn auch sei, es bleibt immer die Aufgabe, sich zu reiner Anschauung zu erheben. Diesen erhabenen Zweck teilen dann Philosophie und Menschenhistorie と。

以上述べた所から彼は哲學と云ふものを如何に解して居たかと云ふことが推測せられ得ると思ふ。彼によれば哲學は「Theorie」である。しかしながらそれは「思辨によつて得らるゝ結果」ではない。「僅少なる概念よりなる乾枯びた圖式」ではない。かゝるものは真正の意味では「Theorie」と云ふことは出来ない。「Theorie」の本來の意味は直観（Anschauung）である。特殊なものを通して、その中に存する普遍なものもを擱むことである。何となれば普遍的なものは、彼によれば特殊なものの中にあり、「特殊なもの」は普遍的なものをその中に包蔵する」からである。彼は特殊な事實によらず、思辨的に、單に一般的、抽象的形式にのみ拘泥するものを mechanische Lehrmeinung となし、これに對して、事物の中に没入して、その法則を理解するものを lebendige Ansicht と云つて居るが、これこそ眞の意味に於ける Theorie である。彼は云ふ。「アリストテレスは、その云ふ所によれば、對象の神的なるものを理解することに努力したと云ふことであるが、彼の發見し、言ひ表はさんとした所のものは、この對象に内在す

る言葉である」と。彼はアリストテレスの方法を以て己れの方法とした。彼の求めんとしたものは、對象の中に存するロゴスであつた。哲學の道は普遍より特殊への道ではなくして、特殊より普遍への道でなければならぬ。von oben nach unten ではなくして、von unten nach oben でなければならぬ。換言すれば特殊の事實から出發して普遍的なもの、直觀に達せねばならぬ。歴史も亦然りである。彼が眞正なる哲學は眞正なる歴史と矛盾せずと云ふは、かゝる意味に於てである。

彼は現實的な歴史の根柢に、實在的なものとして精神を認めて居たことは上に述べた所であるが、しかし彼はこれをヘーゲルの所謂「世界精神」と云ふ様な意味で、普遍的なものと解しては居なかつた。

彼の所謂世界史 Weltgeschichte (彼はこれを又 Allgemeine Geschichte, Universalgeschichte, Geschichte der Menschheit などとも云つて居るが) は、國民であるとか、民族であるとか、或は國家と云ふが如きもの、互に作用し、關聯する限りに於てのみ存し得るのであるから、従つてこの國民、或は民族、或は國家が世界史の基體でなければならぬ。然るにこの國民や、國家にはそれト特有な精神的生命、或は特有な自我が存在するのである。この國民精神の個別性、従つて又國家の個體性 (彼は Nationaler Geist 或は Geist der Nation 或は單に Nationalität と云ふ語を屢々使用して居るが、これが實に彼によれば國家の基礎をなすもの、従つて國家は國民なくしては存立し得ざるものである。勿論、彼はさうは云ふもの、國民と國家とを、直ちに同一視するものではないが) を強調力説すると云ふこと、略言すれば國家即

精神的實體説は、かの *Historisch-politische Zeitschrift* (一八三二——三六年) に於ける諸論文を一貫せる根本思想であつたが、それがこの雑誌の最終號をかざる *Politisches Gespräch* に於て、最も鮮かにあらはれて居るから、少しくこれについて述べて見よう。

彼は歴史認識の方面に於て普遍主義に反對した様に、國家と云ふものを取扱はんとする場合に於ても、さうであつた。彼によれば初めに普遍的なるものが實在し、それが特殊化して個別的なものとなるのではない。眞の意味に於て實在するものは特殊的、個別的なものであつて、普遍的なものは單に形式的なものに過ぎない。従つて特殊なものから、普遍的なものに達することが出来るが、普遍的なものからは、飛躍なくして、特殊に達することは出来ない。これを國家について云へば、國家と云ふ普遍的、抽象的概念から特殊的な國家を演繹することは不可能である。これを國民について云へば、人間性一般が實在し、それが環境の異なるによつて、特殊化して、個々の異なる國民が生ずるのではない。従つて彼はフイヒテの「地球の表面は海洋、河流、山脈によつて切斷せらるゝが故に、これによつて又人間は當然分離し、かくて種々なる國家が成立するに至つた」と、云ふ見解にも反對せざるを得なかつたのである。彼によれば各國家は何れもそれに特有な、特殊の傾向、本源的な、固有の生命を有するもので、本來互に獨立せる個體、或は精神的實體である。従つて國家の外部に對する活動も、その内部に於ける經營も、皆この生ける、それに内在する個別的な精神的原理に基づくものである。しかしそれは國家に於て然る

のみではない。同一のことは又、例へば言語、藝術、法律、宗教等の文化現象についても云ふことが出来る。言語を例にとつて之を云へば、一般的、哲學的文法から、特殊な、生ける言語を理解することは出来ない。これと同じく藝術に關する一般的抽象的理論から、特殊の藝術をば演繹することは不可能である。法律も亦然りで、それは單に思辨の産物ではない。換言すれば普遍的な法律の概念からは特殊な法律を説明することは出来ない。概括して之を云へば、「普遍的な理論から特殊なもの直觀に達する道はない。」これによつても彼は思辨によつてなれる抽象的な理論から出發することに如何に反對であつたか、理解せらるゝのであるが、すべての文化現象は何れも個別的な、生ける精神的生命の發現である。従つてこれをそのまま、國民性を異にする、他國に移植することは不可能である。彼は十八世紀の普遍主義、即ち人間は理性的動物で、その點に於て一様である。従つて一國に行はるゝ政治、法律は又他國にも通用すと見做す見解に極力反對した。彼によれば「精神なるものは一國民が發明した形式を他國民に傳達し得る程、しかく粗雑なるものではない。」如何なる國家にもそれに特有な精神的生命が存する。この特有な精神的生命を、歴史を通じて認識することこそ歴史研究の任務である。又これを認識し、理解して益々その特質を發揮せしむることこそ國家の任務でなければならぬ。彼が歴史・政治雜誌に於て試みた所のものは、獨逸國民の本質を歴史によつて明かにし、かくて當時佛蘭西の方より迫り來る革命的自由主義に反對せんとする所に存したのである。彼は云ふ。Aber überdies scheint es nur unsere eigentliche

Aufgabe, den deutschen Staat so zu sagen zu entdecken, seine Grundzüge in dem Vorhandenen aufzufinden und auszubilden. と。これは彼が該雜誌の編輯を引き受けた時、一八三二年寄稿を依頼せんが爲めに Karl Joh. Friedr. von Roth によせたる書簡中の一節であるが、それは兎に角、吾人がかの Politisches Gespräch を讀んで想起するものは歴史派の代表者 Friedrich Carl von Savigny である。何となればかの對話に現はれた思想はサヴィニーの思想と相通する所は尠くないからである。否、その根本思想に於ては彼此互に一致するからである。即ちランケは國民精神を一切の文化現象の根柢にあるもの、逆に之を云へば文化現象は何れもこの國民精神の發現なりとなすのであるが、サヴィニーも亦これを以て民族精神に根ざせるものなりと主張する。今こゝにサヴィニーの説を詳説する違がないが、彼の所謂民族精神は一切の文化現象、殊にはその専門とする法律の、よつて以て説明せらるべき基本概念であつたことは疑ふべからざる事實である。彼によれば一民族の文化現象は例へば言語にしても、宗教にしても、藝術にしても何れも該民族に特有な精神の特殊化して現はれたもの、従つて又その民族と共に成長し、變化するもので、任意に作られ、任意に脱がれ、任意に着換へらるべき衣服の如きものではないと云つて居るが、これはランケの一國民の發明せる形式は、そのまゝ他國民に傳達せらるゝものでないと云ふことと、その意味する所を同じうするものと云ふべきである。かくの如くこの兩者の思想に一致する所あるは決して偶然ではない。サヴィニーはランケの最も親交せる一人であつたからである。ランケ自らの言

ふ所によれば、彼はサヴィニーの弟子ではなかつたが、その著書をば夙に研究して居り、且つ三十年來、一週一度は相會するを常とし、時には又日々相見えたと云ふことであるが、これによつてもその交際の如何に深かつたかと云ふことが察せられやう。現に該雜誌の編輯者としてランケを推奨せるものはサヴィニーであり、躬自らもその雜誌の寄稿家の一人であつた。又その政治對話の人物は Carl と Friedrich と云ふのであるが、それがサヴィニーの名をかりたものとも當然見られ得るのである。かくの如くこの兩者間には親交があつたのであるから、ランケの思想を分析すれば、その一要素としてサヴィニー的思想の、その中に見出されると云ふことは、蓋し當然のことであらう。

余の述べんとする所は少しく横道にそれたが、彼によれば各國民、各國家はそれ自體に於て存在する精神的實體であり、諸種の文化現象はその顯現である。然らばこの精神は如何にして發現し來るのであるか。こゝに吾人はカントを引合ひに出して見ても、必ずしも不當ではないと思ふ。カントは知らるゝ如く、人間に與へられたる素質が完全に實現すべきことを以て、歴史發展の終局と見做し、而してこの素質を發展せしむる手段は Antagonismus であると云つて居るのであるが、ランケも亦この Antagonismus を以て、精神の發展に缺くべからざる條件と見て居たのである。彼によれば國民と國民とが互に接觸すれば、そこには必ず Antagonismus が生じ、葛藤と鬭争とがあらはれ來る。何となれば zu streiten ist die Natur des Menschen であるからである。この鬭争中に、萌芽としての、或は素質としての精

神が現はれ來るのである。彼は云ふ、「諸種の文化現象は、各國民の特殊的生活に即し、非常に異なる形に於て現はる。しかもそれは決して平和にして、障害なき發展をなすものではなくして、連綿不斷の葛藤と鬭争との間にあらはれ來るものである」と。しかしこの鬭争によつて而してその中に現はれ來るものは、單に文化現象のみではない。國民性と云ふが如きものも實に「種々なる民族系統の鬭争中に於て意識せらるゝに至るものである。何となれば、國民と云ふが如きものは、自然ながらに存するものではない。例へば英吉利、伊太利の國民性と云ふが如きものは、土地や、人種の産物ではなくして、大事變の創造物」つまり歴史の産物であるからである。彼は獨逸國民の特質を、歴史によつて發見せんとしたのも、この理由に基づくのである。しかし又同時に、歴史研究は常に普遍に着眼しなければならぬとか、或は世界史的ならざるべからずとか云ふ彼の主張も、亦この理由に基づくものと云はねばならぬ。何となれば如何なる國民も常に他と關聯して存在し、而してそれ等が互に相争ひつゝ、發展して行くもの、然るに彼によれば個々の國家や、國民が相關聯して全體をなす限りに於て世界史なるものが考へらるゝからである。

以上述べた様に精神的生命は世界史的鬭争によつて發現し、客觀化する。この客觀化する精神が文化である。かくの如く文化は精神的生命の客觀化せるものであるが、しかしこの精神は、上に述べた様に一概念の下にもたらされる程、單純なものではなくして、これをその内容より云へば、彼自ら云つて居

る様に無盡藏であるから、その本質は一語では到底完全に言ひあらはせない。それは又種々なる形相を示すものである。番に藝術や科學のみではない。宗教も國家も法律も道德も、否、精神的諸力の理想に向ふ自由なる發展は皆これによつて包擁せられる。しかし精神の本質或はその内容は先天的に規定し得ざるものであるから、現在吾人の知れる、或はこれ迄發現し來れる文化の諸相が、文化の全内容をなすものであると云ふことは出來ない。將來に於ては吾人に未だ知られざる、新しい文化の現はれないと云ふことは保證し得ない。又それが如何なる順序をとつて、何時、何處に現はれ來るものであるかも豫想は出來ない。「人類は發展の無限的多様性を己れの中に藏し、而してそれが漸次に顯現し來る。但しその顯現し來るや、吾人には知られざる法則に従ふもので、人の考ふるよりもより神祕的にして、より偉大である」と云ふのも、以上のことを言つて居るものと解することが出來やう。

## 五

以上、余は存在としての歴史が、ランケによつて如何に觀られたかと云ふことを、精神或は精神的生命なるものに觀點を置いて述べて來たつもりであるが、しかしそれ丈では、勿論未だ精神について云ふべきことを、云ひ盡したと云ふことは出來ない。一體この精神なるものは、ランケに於ては、特にその宗教觀と密接な關係を有するものであるが、しかしこのことには未だ少しも言及しなかつた。更にこの



精神は歴史的現象の根柢に存する實在的なものとしてのみならず、それが又現實的な歴史に於て客觀化した方面からも觀られることが出來、又事實、觀られて居るのであるが、しかしこの方面も亦未だ明かに考察の中に引き入れなかつた。然るにこれ等の方面は、かの先きに留保しておいた理念にも關係を有するものであるから、こゝではこの理念なるものを考察しながら、それ等精神について、まだ云はなかつた方面を附けたして行かうと思ふ。

さてこの所謂理念の名によつて呼ばるゝものは、ランケにあつては、その全集中隨所に見受けられる所のものであり、従つて彼の説く所は理念説とも稱せられ得る程のものであるが、しかしこの理念なるものは、決して一義的に解せらるべきものではない。勿論彼はこれを、精神であるとか、生命であるとか、道徳的なエネルギーであるとか、精神的な力であるとか云ふやうなものと、異語同義に見て居たことは、先きに述べた所であるが、しかしそれは常にさう云ふものとしてのみ使用せられて居るのではない。その見方、或はその着眼點を異にする所からして、それが又異なる意味にも解せられるのである。従つてランケの理念なるものを問題とせんとする時は、特にこの見方の相違と云ふことを考慮する必要があるやうに思ふ。若し然らずして漫然之を見れば、その理念説に相矛盾する所あるが如き觀を呈するからである。然らば彼はこれを如何なる方面から觀て居たのであるか。私見によれば彼はこれを少くとも二つの方面、即ち一方に於ては、それが何處から來たものであるかと云ふ、所謂起源の方面と、他方

に於てはそれが現實的な歴史に現はれた方面とから考察して居るもの、様に思はれる。

先づこれをその起源の方面から見れば、(この方面が彼の宗教觀と關係を有するのであるが)精神とか、理念とか云ふものは、彼によれば、神にその起源を有するものである。それは神の人間に與へたるもの、云はゞ神の人間に吹き込める息である。このことを立證する語句は決して尠しとしないのであるが、今その二三を擧ぐれば、彼は Die Idee ist göttlichen Ursprungs と云ひ、 Die Idee, der wir göttlichen Ursprung zuschreiben と云ひ、或は Der Geist des Staates ist göttlicher Anhauch と云ひ、 Gedanken Gottes と云ふ。又他の處には das Göttliche und Ewige, aus dem die Ideen quellen といふや、 das dem menschlichen Geschlecht von der Gottheit eingehauchte Leben と云ふ様な句も見えて居る。更に一八八〇年の「告白」中には Ich bleibe einfach bei dem Worte, dass Gott dem Erdkloss seinen Geist einhauchte と云ふ言葉も存するのであるが、これ等の言によつてこれを見れば、彼は精神や、理念を以て神から來たものと觀て居たと云ふことが明かである。しかしこの精神や、理念は決して完成せられたる形態に於いて與へられたるものではない。むしろそれは云はゞ萌芽として、神の人間に植付けたもの、或は可能なるものとして、これに賦與したるもの、従つてそれは Verborgene Elemente であるとか、 Geheime Kräfte であるとか名づけられることにもなるであらうが、この萌芽を發達せしめ、この可能なるものを實現化せしむるものは人間の衝動である。しかし今この人間の衝動と云ふことをば姑く問題外に措いて、精神

そのもの丈けをとつて考へて見れば、それは己れ自らの中に理想を有しこれに向つて進んで行くものである。換言すればこの精神は己れの本質を完全に實現せんとする衝動を初めから有するものである。彼はこのことについて次の如く云ふ。 Alles Leben trägt sein Ideal in sich : der innerste Trieb der Geistigen Lebens ist die Bewegung nach der Idee, nach einer grösseren Vortrefflichkeit. と。この點から見れば精神的生命は進歩するものであると云ふことになる。一體彼は進歩を認めたか、それともこれを否定したかと云ふことが學者によつて問題視せらるゝのであるが、しかし精神的生命自體についてこれを云へば、換言すれば現實的な歴史をはなれ、觀念的に、可能なるものとして神の人間に賦與せる精神について之を云へば、彼はたしかにこれを進歩するものと考へて居たと云はねばならぬ。しかしながら人間は單に精神からのみ出來て居るものではない。若しさうだとすれば人間は神と異なる所がなくなるであらう。しかし人間は他の動物と同じ様に、地上の動物である。従つて單獨的には、必然的に、その生得的な理想へ向つて進むべき筈の精神も、現實的な人間の歴史に於ては、一直線的に進歩することは出來ない。そこには障害あり、失敗あり、退歩も往々あらはるゝことがある。しかしそれにしても大局より之を見れば進歩は之を否定することは出來ない。彼は云ふ。 Bisher ist die geistige Entwicklung noch immer fortgeschritten ; selbst den grössten Hindernissen und widerwärtigsten Einwirkungen zum Trotz : warum soll das nicht so noch andauern ? Denn das Ziel ist bei weitem nicht erreicht und die geistige Bahn

vielleicht unendlich. と。彼から見れば人間史は、よしそれが如何なる障害に遭遇するも、しかもなほ理想へ向つて進み行く精神の運動である。之を絶対者たる神の方より云へば、神は人間史に於て、その賦與せる精神を完全に實現せしめんとして居るものと云ふことが出来る。彼が *Pläne der göttlichen Weltregierung* と云ふのも、かゝることを意味するものではなからうか。この様に見て來れば、彼の思想は非常に宗教的であり、形而上學的であり、又目的論的であつたと云はねばならぬ。

以上は彼の理念觀の一面であるが、しかし彼は先きにも云つた様に、理念をば現實的な歴史に現はれた方面からも考察して居たのである。この場合に於ては、人間の思考や意思の作用によつて生産せられたる結果、或は現實化し、客觀化せる精神や精神的傾向が理念と名づけられる。かの *objektive Ideen* と云ひ、*grosse Richtungen* と云ひ、*allgemeine Tendenzen* と云ひ、又 *entgegengesetzte Doktorinen* であるとか、*Kämpfende Kräfte* 等々と云ふが如きは、何れもこれを表現せる言葉である。實際について之を云へば、人間が過去に於て作り出した文化の總體、吾人を圍繞する精神的環境、過去と現代をつなぐ傳統的精神、これ等が即ち客觀的理念と稱せらるべきものである。彼の所謂羅馬帝政の理念、中世獨逸帝國の理念と云ふが如きものは *grosse Richtungen* であり *allgemeine Tendenzen* である。宗教方面に於ける舊教と新教との對立、國家の内部に於ける民主政と貴族政の對立、これ等は *entgegengesetzte Doktorinen* であり、*Kämpfende Kräfte* であつて、何れも彼の所謂理念である。しかしその最も明かなる規定は、かの

「近世史の時期について」(Über die Epochen der neueren Geschichte)の中に於ける指導的理念の説明である。これは何人も知れる所で、今更云ふ迄もないこと、思ふが、それによれば指導的理念とは各世紀に於ける大なる精神的傾向を指して云ふのである。例へば十五世紀、及び十六世紀の前半に於ける藝術の隆盛、十六世紀の後半に於ける宗教的運動、十八世紀に於ける功利主義的傾向と云ふが如きものは何れもそれである。この様に見て來れば彼の所謂理念は歴史を超越したり、又はその埒外に出づるものではないと云はねばならぬ。

これ迄述べて來た所からして、彼は當然理念を二つの方面から考察して居たものと云ふことが出來やう。従つて特にランケの理念を問題とする時は、その何れか一方面の見方のみによつて之を規定してはならない。然るに學者の之を論ずるものの中には、その起源の方面からする見方に従ひ、かくて彼を以て宗教的神祕主義をとるものであると見るものがあり、又他方に於ては歴史に現はれた方面に重きをおいて、ランケは決して神祕的にあらず、形而學的にもあらずとなすものがある。前者を代表するものはランプレヒトであり、後者に數へらるべきものはローレンツや、ヒンツェ等である。今これ等の學者の主張を詳細に述ぶる所なくして、これを批評すると云ふことは避けねばならぬことであるが、要するに彼等は何れも一方に偏したものと見ねばならぬ。ランケは、先きに述べた様に、文獻學的研究より進んで歴史に入つて來たのであるが、しかし彼は又初め神學に志した程で、その宗教的教養は決して尠くは

なかつた。彼は一面に於てはツキデデスや、ニーブールの影響を受けたが、他面に於てはフィヒテやル  
ーテルに負ふ所も多大であつた。従つて彼は歴史家としては、理念を歴史の埒内に於て求めねばならな  
かつた。宗教的教養の方面からしてはこれを神に關係せしむることも、彼には當然許されたことであら  
う。しかし宗教的信仰を前提とし、これを基礎として、歴史研究に従事すると云ふことは、彼の歴史的  
良心の到底許し得る所ではなかつた。彼はむしろ史實の研究によつて神意のある所を知らんとしたので  
ある。彼は宗教家たらんことを志せる次弟ハインリッヒに與へたる書簡中に *Fern, fern sehe ich mein*  
*wahres Ziel. Bei diesem wahren Ziel, hoffe ich, finden wir uns zusammen; es seien auch unsre Bahnen*  
*verschieden* と云つて居ることは、これを明かにするものと云はねばならぬ。(11' 111' 110)

参 考 文 献

- ランケ全集中の論文の特に關係あるものは、
- Bd. 24. Abhandlungen und Versuche.
- " 33-34. Geschichten der romanischen und germanischen Völker.
- " 37-39. Die römische Päpste.
- " 40-41. Historisch-biographische Studien.
- " 49-50. Zur Geschichte Deutschlands und Frankreichs.
- " 51-52. Abhandlungen und Versuche.
- " 53-54. Zur eigenen Lebensgeschichte.

ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの(船田)

／ 著 者  
L. v. Ranke, Über die Epochen der neueren Geschichte.

Ottokar Lorenz, Die Geschichtswissenschaft in Hauptrichtungen und Aufgaben. 1886.

〃 〃 Leopold von Ranke. 1891.

Karl Lamprecht, Alte und neue Richtungen in der Geschichtswissenschaft. 1896.

Wahan Nalbandian, Leopold von Ranke's Bildungsjahre und Geschichtsauffassung. 1902.

Eugen Guglia, Leopold von Ranke's Leben und Werke. 1893.

Hans F. Helmolt, Leopold Ranke. 1920.

Hermann Oncken, Aus Rankes Frühzeit. 1922.

〃 〃 Zur inneren Entwicklung Rankes. (Gothein-Festgabe. 1923. S. 199-241.)

Ernst Simon, Ranke und Hegel. 1928.

Otto Diether, Leopold von Ranke als Politiker. 1911.

〇Moriz Ritter, Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft. 1919. S. 362-421.

Joachim Wach, Das Verstehen. 1933. Bd. III. S. 89-133. Die Lehre vom geschichtlichen Verstehen bei Ranke.

Erich Rothacker, Einleitung in die Geisteswissenschaften. 1920. S. 153-162.

Ernst Troeltsch, Der Historismus und seine Probleme. 1922. S. 271-277.

Georg von Below, Die deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unseren Tagen. 1916. S. 21ff.

Benedetto Croce, Zur Theorie und Geschichte der Historiographie, 1915. S. 244ff.

Otto Hintze, Historische und politische Aufsätze. 4. Bd. S. 1-12. Über individualistische u. kollektivistische

Geschichtsauffassung.

Friedrich Meinecke, Die Entstehung des Historismus. 2 Bde. 1936. 2. Bd. S. 632ff. Beigabe: Leopold v. Ranke, Gedächtnisrede gehalten am 23. Januar 1836 in der Preussischen Akademie der Wissenschaften.